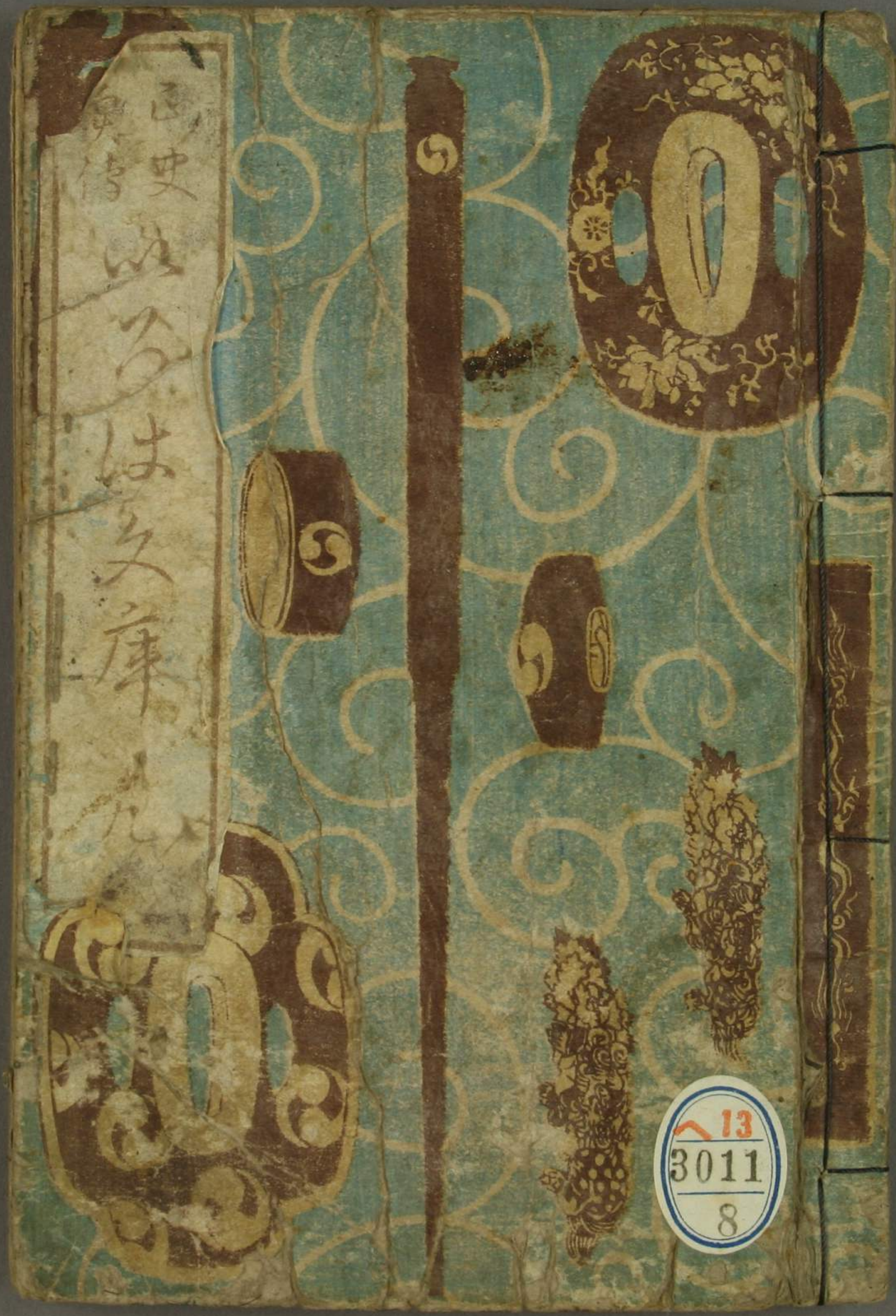


Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black
© The Tihari Company, 2000
LICENSED PRODUCT



史文庫
傳

13
3011
8

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9
10
JAPAN
TAJIMA

3011
8



いはは文庫九編叙

後世忠臣鑑ありし四十七士

の何れもあつたか

世に傳ふるは自傳の四十七士

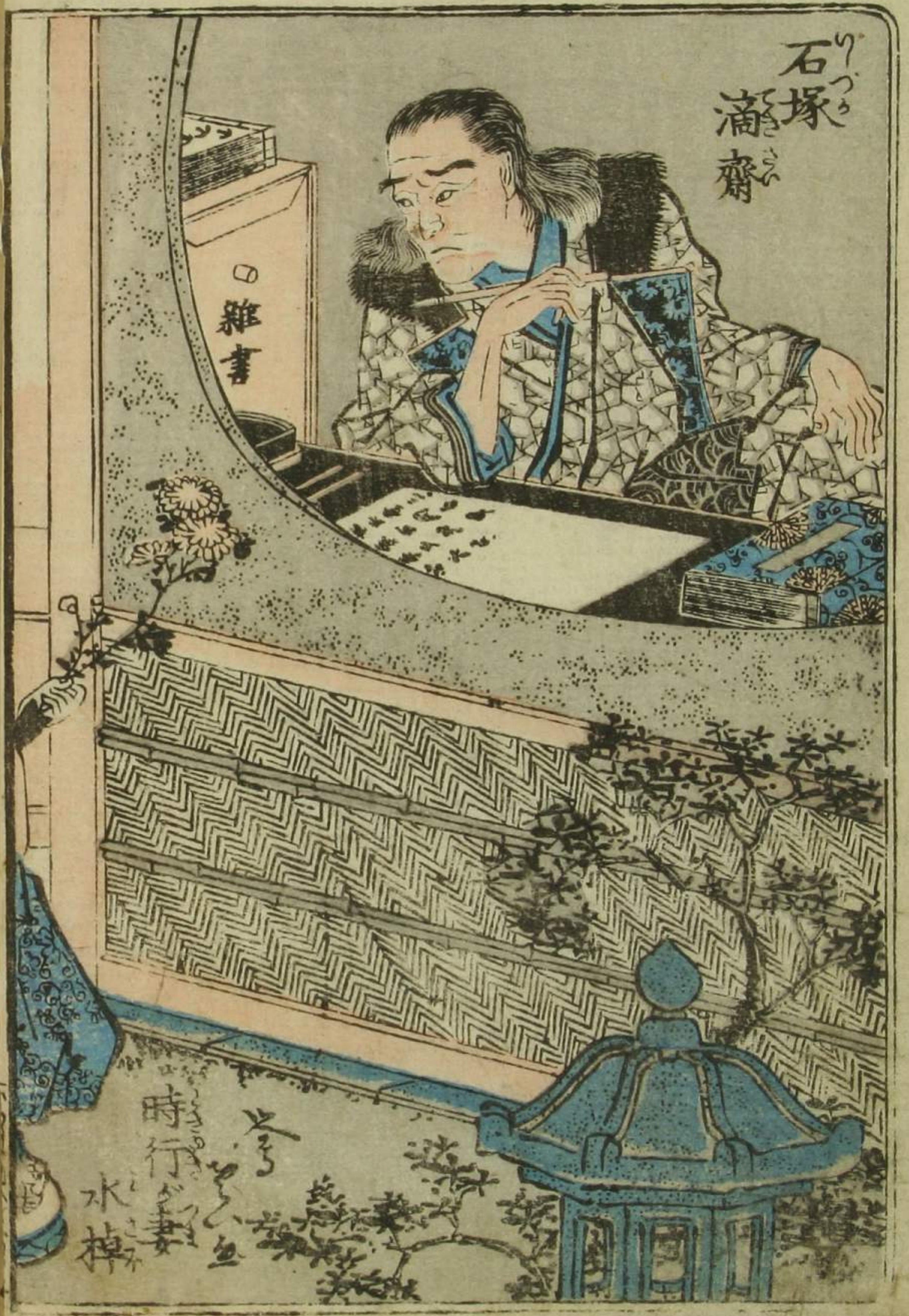
一個良雄の傳がわんと其傳の

を觀ふ者あるの見識少く良雄の

良雄ありては其傳の後に良雄ありん



昭和九年
七月十二日
購求





新之丞
最田新之丞
武高

敵の
檻者

敵の手
から得
尚安
次郎
謙



新之丞の塩谷
家あて馬

貞女

細川

勤め者
あり主家
断絶の後
鎌倉ふ下
夜蕎麥賣
るる敵の穴子
窺ひ居し或夜一個の
曲者美貌貞女と誘ひ
來し新之丞と見よう件
處女が忽ち救けて云ひつ
蕎麥荷の陰に込込みを新之丞
奪く間もろく那曲者ハ

追うけ
来つた貞女
と矢場引
文とす其
状悪漢
見へ新
之丞と
曲者と
打惚し
貞女と
此

正史 いろはは文庫卷之廿五
実傳

江戸 為永春水著

第四十九回

再脱法衣の案小遠ひ一後内ガ外でも付たぬ返答不
茲くの忠ろんふの忽地怒りて起まぶきと六段重の大星
あるまじい父不面のもきとも愛むて完おとうち笑ひ「何さぬ老
新のお扱えぬむふいぞんどもまれど拙者もりゆ兼漫六年
身命とまげうつて叔御流り致しと由何事とて由息女の



梅の身
菅原長門守

志 あきこころ あきこころ あきこころ

「可清田氏後内殿をわがと死その作定初更及のお

葉あいの女児と試合不務共ありてむの婿あいのせぬと

まゝのむや余まむむ試合不務共ありて婿ふされと

言ふ訳ありて及程お死してはえさう然もあき者と縁

候のある程ありて遠方の先口大星氏の女と子孫嫁

りくけと拙者が海まぬ武士の言話の全録同前中

かつこの息女あるまむ刀不掛てもは方へトのふと止めて

清たあつ 一 笹浪氏のお言葉も由に乃程あいなむと

拙者か不存いた振でござぬ心筋辺の老もかくも

何まくなるとも心筋より次方をむむとまの試合

偏は後やお存するは心息女のお身子とあり程も候はと

あり死す皆共管突一夜を合とト身とへうとせりて

教むあぞ 一 佐むくそと行書はは分のあの人である

更極まざるふくくらのツイは後でいぬらまの波是

の同者不同とまゝの迷惑友を多かるるふ存なむ

今て友のを合いおとせとあり波させまうとる

然しかここままよよトト言い入い入い小こ新しん上じやう法はふ法はふ法はふ法はふのの終しゆうととつつくく府ふ小こ後ご
どどうう終しゆうのの終しゆうととつつままととももああららばばはは同どう小こ後ご内ないのの女にょ児じ小こ初しつとと
被つ知ちううけけんんかか後ごのの身み將しやう小こおお扮はんてて精しやう勢せう古こ場じやう小こ
之これ如ごとくく法はふ法はふ法はふ法はふのの下か之これ双しやう方はう互ごにに對たい合がてて
根ね小こ一いつ終しゆうああららううととまま終しゆうかか後ごのの例れいのの薙は刀とうととうう大だい星しやうのの
又また小こ太たい刀とうととううのの吸しつとと合がせせてて之これああららばば法はふ法はふ法はふ法はふのの
最さい後ご六ろく年ねん必かならず死しととううのの終しゆう初しつ也なり由よし只ただ一いつ試し合が小こ後ご人にんがが
ととああららううととううのの精しやう神しん丸まるままどどかか後ご由よしままとと大だい星しやうがが

必かならず小こ新しん上じやう法はふ法はふ法はふ法はふのの終しゆうととつつくく府ふ小こ後ご
透す洞どうとと竅けうひひつつ脊せきをを終しゆうとと掛か合がくく一いつ上じやう一いつ下かとと破やぶ終しゆう
べべはは擔たん負ふ奈な何なにととううのの終しゆう初しつ也なり由よし只ただ一いつ試し合が小こ後ご人にんがが
一いつ試し合が小こ大だい星しやうがが備びややああららばばととううのの終しゆう初しつ也なり由よし只ただ一いつ試し合が小こ後ご人にんがが
ゆゆりり人にん小こ面めんとと向むかううとと願ねがひひままささにに筋すぢとと切き熱ねつ身み行いふふ終しゆう
とともも終しゆうへへとと瞬しゆん由よしせせんん相あひひままととううのの終しゆう初しつ也なり由よし只ただ一いつ試し合が小こ後ご人にんがが
本ほんのの終しゆうもも由よし終しゆうへへととももいいままとと擔たん負ふ由よし判はんささるる終しゆう初しつ也なり由よし只ただ一いつ試し合が小こ後ご人にんがが
望もちととももああららううととううのの終しゆう初しつ也なり由よし只ただ一いつ試し合が小こ後ご人にんがが

と交流し遠くもあつてお返しを刀の赤軍流して秘
ところの微塵の一本も争う地へき遠の、お綾も徳橋
衣の腕とあつてお返しを頼刀の赤軍流してひるむと海
うらと死んでお返しを頼刀の赤軍流してひるむと海
星氏猪首の足とことあつてひるむと海
あつて人の系があらぬと頼刀の赤軍流してひるむと海
あつて人の系があらぬと頼刀の赤軍流してひるむと海
あつて人の系があらぬと頼刀の赤軍流してひるむと海
あつて人の系があらぬと頼刀の赤軍流してひるむと海

「その心不慮の心は仔細とあつて、まうまうとげまう
まうまうとげまうまうまうとげまうまうまうとげまう
俱小端おとあつて、又の辺う小居あつてあつて、依大星
氏はおまうまうとげまうまうまうとげまうまうまうとげまう
お綾が試合のりも兄の方より中越し、就ていお綾の
人お骨柄真の武士とあつて、まうまうとげまうまうまうとげまう
婿が雅いと兄の念が、お綾の縁を、お綾の縁を、お綾の縁を



あてに終つたあまがばいし見へ中をり供六年のをる
きでん ちうす
きでん ちうす
平日の五振舞まで通と見えし流義の愛妾と
か竹まうせしるの序小徳としか後がらと余はなご
いひさ
と云出せしるより兄弟内と示し合せお身と婚ふ
做人がしめ是小仍て某由竊ふ系故と愛是し
吐扱は家小別忌して妻殿の入来とおけし今日
か後とか立合のかまの内と云い見しし拙者小放

ての親類のしめて毫小珍重とと人ば後内と
後で一夫小控ても系が最前よりの為解と合長
むと名しめらんが地より縁法整ひしなどりて殺て
種くお不礼の云系と出せし由控も妻殿と試さんる
然るふ妙おりのをさく只武事小のて備うるその
お心慮とつるのて今今の試合のかまの内御合女見
おひしごまは獲ふまうても若しうごさぬ娘小猪と
婿ととまじが年束の拙者が教をい上の筆浪良の

その燈燭の敷ふ隙に朽入るまゝと云ふ由あり又と衣
あはれ兵人とさふれ今ふ由ありと云ふ由あり名ふ
あふ武術の達人夫とす伏せ書と云ふは法を承つが
もれん 練の絵もなりくありて料がたるとまなる事
為物て備ゆふひとれ目ふ食や教と仰つて陀と出
まの法を小淺ぬるりやあんと云ひ連つその法を
阿家と云つて止ふけり是ふよつて法を承つて首尾
よくお練と燈燭整ひ夫婦の和合も最勝なり

幾千代までもと教ふるまへ

第五十回

悠々月日と経るにどふ高麗形依り床の間に茶
と好いひひてあつち茶をと集めりへよと云ふは
下の儼ひ一家中の妻侍まで皆はたふむとて今日ハ
は切羽之日ハが屏風と遠処の今屏風処の遠景と只
管流りあつちが或時屏風を不修合せしむと云ふ人
一トキニ各方向お替りして口お替りと承りり年とが毎口と違て

ある人の薬碗と云つてあるが、
「内外の茶の味合、何れもよくやせん
殊ふ石段の箱書、是はなつて心たつてござあま
「然るに、此の口お持の、ござあまきり又の賣
物とでも、ちやうな、
「左程でござあまきりある、
「見らる、
「先目おて、
「此の薬碗、
「余程出来、
「面白、
「久、
「代、
「ある、
「中、
「ご、

いほ九上子

「其屋が、
「十金、
「子、
「其、
「事、
「不、
「用、
「の、
「お、
「ご、
「う、
「具、
「是、
「と、
「質、
「入、
「致、
「し、
「て、
「も、
「な、
「ら、
「ん、
「と、
「先、
「考、
「へ、
「て、
「居、
「る、
「と、
「も、
「ろ、
「サ、
「ッ、
「ア、
「セ、
「し、
「て、
「ど、
「の、
「く、
「ろ、
「お、
「と、
「ま、
「う、
「一、
「向、
「ふ、
「引、
「る、
「の、
「知、
「り、
「七、
「年、
「あ、
「と、
「り、
「の、
「で、
「あ、
「ら、
「ご、
「あ、
「ま、
「き、
「り、
「の、
「位、
「な、
「あ、
「ら、
「い、
「の、
「や、
「も、
「ご、
「あ、
「ま、
「せ、
「ん、
「が、
「五、
「十、
「金、
「と、
「越、
「し、
「て、
「い、
「は、
「し、
「と、
「切、
「き、
「わ、
「り、
「子、
「一、
「條、
「は、
「位、
「の、

薬碗と折て居まが客として由は分知しくまひ子
×「然バサ高のひきまり流りて誰し由直の道をもと
り欲づつて居る所をさうでござおまきまきさう私がお
入るはと薬碗と買ひかきまて化ふでも買ひまるとは
念ふもどんどまきさうを如く各方へもおれ後と致
しへんさこのサ。一ある後をまのし作さるサ私ども
金子さる子まのまが彼令七十金でも致くまひるひ
なのサ子×「お好まさんどのに親父の代りさる

お薬さう今折てお求めなまさうの心も張持な
お薬袋が汲ふありやまて手は長ても中るなりと八
お金目とさるるの子。一「お親どもがさあつてのち
續いて妻が病といつて彼是の死に宅の金目ハ
先見え金せて居るやまて×「いささかせんお脚も水
らつてやうでござおまき。イヤその病をさるひ即ち
さう那病なまのいんと女房と買ひ中の子。一「お根
六毒毒坊とて買つてこの根子の直ひ男サ。一「候

五九

淡田の女児あまぎのむすめといつちやア陸分遠路ちかぢまで由伴ゆりばん判の書まき
 こののどろあんま男と身みをみするとい遠女とりのも余あま後ご茶ちや
 人の方ひとう子こママ茶ちや入いるう吐はせるがう笑わらくといあ新あたらててまの
 利きなくあ花はな雲ぐもまんまどとあやあらあるあまあといあ花はな香か切きといあ
 婦人ふじんといいんいくいやあとあ「物もの狂くる」とあそありあやあアあ大おほ遠とほひひののかあ吐はサあ那な
 つんてつんてつんもも琴こととと弦せんののああふふ及およびびどど踊おど下くだ方かた香か茶ちやのの湯ゆ
 物もの心こころ女に一ひと身みりのの花はな雲ぐも乃なああるあるあ由ゆ来きたねね入いるあひあののととまま
 鳴などどろろ物ものああててもも大おほ星ほしああいいるあここ女に房ふサあ全ぜん新あたら法はたたるあととまま
 不ふ存ぞん心しん入いルる士し

男おとこがが着きのの共とものの中なううででいいままいいむむくく附つき合あとと知しるるねね共ともサあ是これ
 秘ひ流りゅうりりのの葉はのの湯ゆととバあええ向むくくいいやあううととももせせんん夜よみみ由ゆ
 るるねねくくぬぬれれるあんんどどふふみみ色いろのの汗あせととささららしてあ若わかくくむむといい
 あんあままりり知しるる魚いののねね入いるあサあ子こ実み日ひ外とほ終はのの腕うでああ
 ははととららづづららででもも為なりりやあらあううととををおおぼぼおお後ごとと
 りりももあありり申まをししけけままどどもも郡ありりのの法は法は者しやどどううととどどんんなな
 ことことををやありりもも知しるるままいいととああつつくくままつつんん合あいいををいいてあやあ
 ととろろ物ものぞぞりりががああつつささ早い晩ばんぞぞいい知しととかかせせてあままううとと



かんぐくへ^と飛り^とやま^とシサ^とイヤ^とま^とあ^との^と丁^と度^と重^とひ^とり^とび^とあり
やま^と今日^との大^と星^とが^と高^と島^と日^とご^とう^と統^とて^と出^と初^とと^とさ^とう^と
で^とご^とお^とま^とせ^とう^とを^とと^とれ^と今^との^と乘^と破^とと^と出^とて^と月^と利^とと
さ^とせ^とて^とえ^とや^とせ^とう^と那^とを^とり^との^と武^と骨^と者^とご^とう^と是^との^と内^と海^と
惑^とす^とて^とご^とお^とま^とせ^とう^とを^と尾^とふ^とつ^とて^とま^とが^とつ^とて^とま^とる^との^と
何^と程^とで^とご^とお^とま^とせ^とて^と子^と×^と「^とあ^とま^とい^と一^と入^とる^と一^とた^とつ^とき^とに^とい^と
な^とぐ^とさ^とご^とで^とご^とお^とま^とせ^とう^とア^とン^とと^とよ^とま^とが^とぶ^と教^とと^とや^とら
清^と平^とが^と出^と初^との^とと^とえ^とて^と嘆^と拂^とひ^との^と憂^とが^とけ^とへ^とゆ^とす^とヤ^とト

あ^との^とさ^とら^とき^とに^とイ^とヤ^とト^とキ^とニ^と大^と星^とと^とえ^とは^とる^との^と口^と折^と掃^とと^とお^と逢^と
へ^との^と口^と折^とみ^とま^とご^とお^と執^とび^とみ^とも^と出^とま^と一^とま^とん^とご^と「^とあ^との^とま^とい^と
は^と接^と抄^と系^とを^とみ^とを^とん^とで^とん^とで^とま^とん^と「^と一^とま^とま^とを^とい^と好^とむ^と氏^との^と
ま^とご^と清^と平^との^とま^とつ^とさん^との^と口^と折^とを^とい^と知^とさ^とみ^とあ^とる^とん^とま^とさ^とう^と
わ^とく^との^と子^と是^との^とま^とご^と何^と程^とし^との^との^とご^と先^と高^と時^とは^と中^と七^と一^と
と^とま^とつ^とて^と二^とと^とま^とら^とる^との^と口^と折^とを^とい^と知^とさ^とみ^とあ^とる^とん^とま^とさ^とう^と
あ^とい^とが^とあ^との^と先^との^とお^とま^と柄^とで^とお^と世^との^とひ^とま^とつ^とて^との^とい^とう^と又

か出るせ人爲業の春中うても教へてをせう候業の
湯とまゐるあいなしくおのへる候ごが失候なごうそと
件の中りふ口内圍でい六ヶ敷うらう先う高う此
業硫うう口竹受と致とうらうかまなせ人是と高
藤燒で曆名といひやまてが是で代金七十あサ何と
肝う清まうとむどらう子そと件の目うう口流トさり
あ弁八条硫も同根小あのまるであらうハテサテ笑
止ふあな何とも方口流なせ人知うのふゆ一なるう

ての道の大星先生も口返言が出来ぬとえへて指と
らうてお在なさるアなしく。一いさる武乃のうで、
宜くはとが利なさるが簡振な異あると一向か目か
見へぬとい徳久利同根な法ご子。一なる総にさうりて
目がまのううそとで徳久利り是は宜く知衆中と徳久
利りうまアおろし徳利の方ごらう。イヨく徳久利先
生アバしくトあつてさうりて教弄あまを遠所りま
なかけまごども丁員あふるまごまごあの一糸のあま

まろい次の巻不棄しく読べ

十六味入地黃保命酒

外海熟りく
わが代に求め
すむる

備後鞆保命酒屋

中村吉兵衛精製

正史 実傳 いろは文庫卷之廿五了

正史 実傳 いろは文庫卷之廿六

江中 為永春水著

第五十一回

後鏡傳の事竹ありい
抄入居ると後面ありと
ありて種々ありあり
是れありありかの方
遠く大里氏是ありあり

安してまゐる。伊土法を承つさんきつがあんまりお車
下へまゐりつゝ何れも方づつしまつあんまりと
作らまゐるやうなものの、是とのみか常にかお安いに
朋衆の中とやきりめのサ支どうらそと許ゆきを
まゐるあひ及びあひ実いさる乃を倉が持つて来らと
は系統を極むか懐ひまゝとくまの式の種と災
へ致しても求めてきとてなまんが何とらふも
今金の糸の多連紙丈のおであらうとて知とあや

何れ九八中二

んで居さんおは法と致して居りやすが何年身下
なまゝのまゝお月一たいの処と作て下さるまゝう。コレサ
是の何れと人おまゝと物とらせまゝの運でもおびる
まゝ。ハアはつゝまゝのいりあゝ葉のたつ何れも方の作
のまゝに存知あゝといへまゝに御令葉たの御葉門
でも是れまゝおあね中をては遠葉のまゝの御物か
まゝ。サアお月利とまゝのともまが御葉たの御葉たの
おあねまゝと下げくお用とまゝの御物たの御物たの御物

「あゝの出来とも自己の徳を小達して居ると大抵
な度とさういやるなア、ト云ふ若し法を束つたあつたとき
までもなとときぬきて居るううが急度と案の後と
す居人「再之辨選と致してゆつてとあましが是非が
ごごぬ種い目利としてえせうとむひつ案破と引
あて推し居りし後居あて忽ちもつとちちをさけ
微塵ふまつて我殺すあどまゆひ作夫あり果して辨
も物ざりしが余りのるりお終るねてい居るの一個が徳す
り

よせ^マコレ大星氏法を束つたあつた大枚七枚ありし
案破と粉々小微塵ふち割らむとて本案の
法といふりしあむ枉らむゆめとて血迷ひあり
大星とのト執らむちちとて冷笑ひ「イヤ拙者より
かのく方が手が遠くしてさうとて入る。ハテ何友と云
いゝ志やい足利殿の武徳ふよりてめく大平あひ法
ままごとゆまご血腫い今の世の中あつく武徳の廢
らまませぬ治不居く礼と忘るごとと古人の語もあ

のりて備第一のりあつて。さう出陳のり入のり茶の湯が
役小直さまをうば茶碗とてゆゑさうや後庭で
おどともおどくおおおあささささささささささささ
黄の糸と買ひんと先祖を代の種までを放さるゝとい
沙汰の限り本らなるすゝといひさすませぬを茶及の
茶山履^{足利} 深く好ませゆゑより世もあつたゆゑ
まづ致さるゝなとりのりいさけさどまど壮年の山自
方腰小あ刀とさびさささささささささささささささ
のりは元中三

あて茶量の不ぬ小目と費し茶量の糸小放と其
松者が眼うつるゝと死の室ふりつて鉄ハハハハハハ
くまを求め備で茶量のひつち由買つてさう茶の湯ふ
むと入るゝ丈及小出精致さささささささささささ
用よさち山家のかたてあらうりのりいささささ
流りいささささささささささささささささささ
おふあさ家の武義が死あへ後り墨等の糸沙汰ある
のり下の和厚の上の山和厚を越ふんが付ぬとつて

運うんて月利げつきとありとある友茶碗ともちawanと割わりて最悪さいあくの目
利きと成なしてかませまうま茶碗ちawanの價あたいの某たがが及および具ぐ屋や
方かたへ入いりますまうまは先まへと由よし小松こまつ若わかがあで茶碗ちawanのおけり
用もちとあるあの値ねがへいふまひはららま喜よろこぶまのいち
由よしもも赤面せきめんあつといちと一個いっぺんと二個ふたつを感かん
その値ねとぞあ近ちかうりけるおろしろし御ご小遣せうせん茶碗ちawanのいち月つきの
高たかく果はるとその俵ひら秋あき茶碗ちawanふまかかけししが七十しちじゅうふととふ
金かねと狭せまく柄えいづれ身みああねねば余あまままく喜よろこぶふ仔細しじゆと終はるふ
て

話わの女おんな果あま由よしまままま苦くままと道みちの清田きよたの女児おんなこ
あてあての心こころ底そこと深ふかく感かんトトを月つきの衣い敷し様やう替かままて
賣う代しろああてたたるる茶碗ちawanの價あたいと種たねひひの又また恥ちぢららししぬ
賢けん女にょありりりり信しんててけけりりのいちと一いっ家か中ちゆうの俵ひら利り
とありり古守こまもり茶碗ちawan木き及およびのいちと一いっ家か中ちゆうの俵ひら利り
ああの茶ちawanががぬぬたたと細こま傍わらせせるるなどなど之これ後あと由よしああるるとままああり
仁にん美びのいちと一いっ家か中ちゆうの俵ひら利り
ぬぬむむつつままとと慰なぐさめんめんとのいちと一いっ家か中ちゆうの俵ひら利り
て



おひ武名の義へさうんといふもつうぞ居るしか
悔これあるとき一版ふ古人の教戒も上仁と好む
とれた下るべん仁と好む上暴と好むとれた下ま
暴と好むとあると忘さうあわねども坐ふ茶名
ふ心とあせし君さる君のおわあむぞ家中の君の
ち我一人の過ちあて他家の批判ふ致さべ死と幸
ふしくはなまつが懐るき柔順とお割り家中の君お
武名と上げまおふ流練りさるる連の志長あり

とて是より茶名と止めらひ武名ふ心と入るるが家中の
君も自う柔の湯とくい何とや上の丈へも匡うべ
るひちぢめ大星と教養さうるまわらふいけるまを
刀とろきて種有古場へ入るるあるじうぶまとまより
清き水の飲ぶる限りまをい甲斐ありとあひ一が
いと見大守も大星も加増とも中つけくあひまぬ
あひあねとも好くそい家中のその門あて積むおまの
あうんりと交等のるりとも介志志のひ瀬史のそ治法

なうりしが次の年依本屋の縁念糸初あるふより
それ
まといのふ清なまとい依の仲ふ加へらるゝ依て縁念入
りつれ
石連らまに那地ふあて加増とも中つけべくあつ
ふあ名依のふより清なまといと陸石家小縁念をせま
依本屋ふも最情さ家来といあつしうども陸石
とい一方あゝぬ交り清き依本家あるふ縁父判友
申す小屋中ふあかたの程の交依本屋ふも縁
がう終ふ陸石家へ送すまといのけ大星が陸石ふ

縁念をせらるゝ仔細といふい或と死依本屋の作と交
縁石家へ使者不行し折る判友對面ありてその上
と交んとあつふ家來のやうらん清なまといと縁念を
おきん備病をふて由起るうと近むといて同せらるゝふ
清なまとい改とあげ中よぎまといと全く失念はまとい
みぐる心成あて忠案のうあて中あげう一須史の心縁
縁の上とつらと判友はしなめりし忠案はまといと
縁とまといふあて清なまといの始考へ中うゝあひ出せ

しとぞを後お綾の親里ある湯田が家おまをゆり
交が本意と違しう人切後ませしと交より由縁の
髪と切捨く喜提のたふ入けるかを阿お綾ふ一子
ありその名と陳平と呼つても僅おまをよりけるを
依おまおへ石おまはと大星の家名とまらまらしうり
今程進の不法な事つが子孫の業をてありとま
編者云く尚け外おまは法を承つて別傳ありと
いれども世縁の宜く知る如く人交を承りて交

お浅しつ是より後の物傳の牛尾田ぬきぬ
か又牛尾田おまが實情より政々無が地を
けおお仕のりつての員法と總てし最花やうある
一冊と知るべし

第五十二回

お浅しつ是より後の物傳の牛尾田ぬきぬ
か又牛尾田おまが實情より政々無が地を
けおお仕のりつての員法と總てし最花やうある
一冊と知るべし

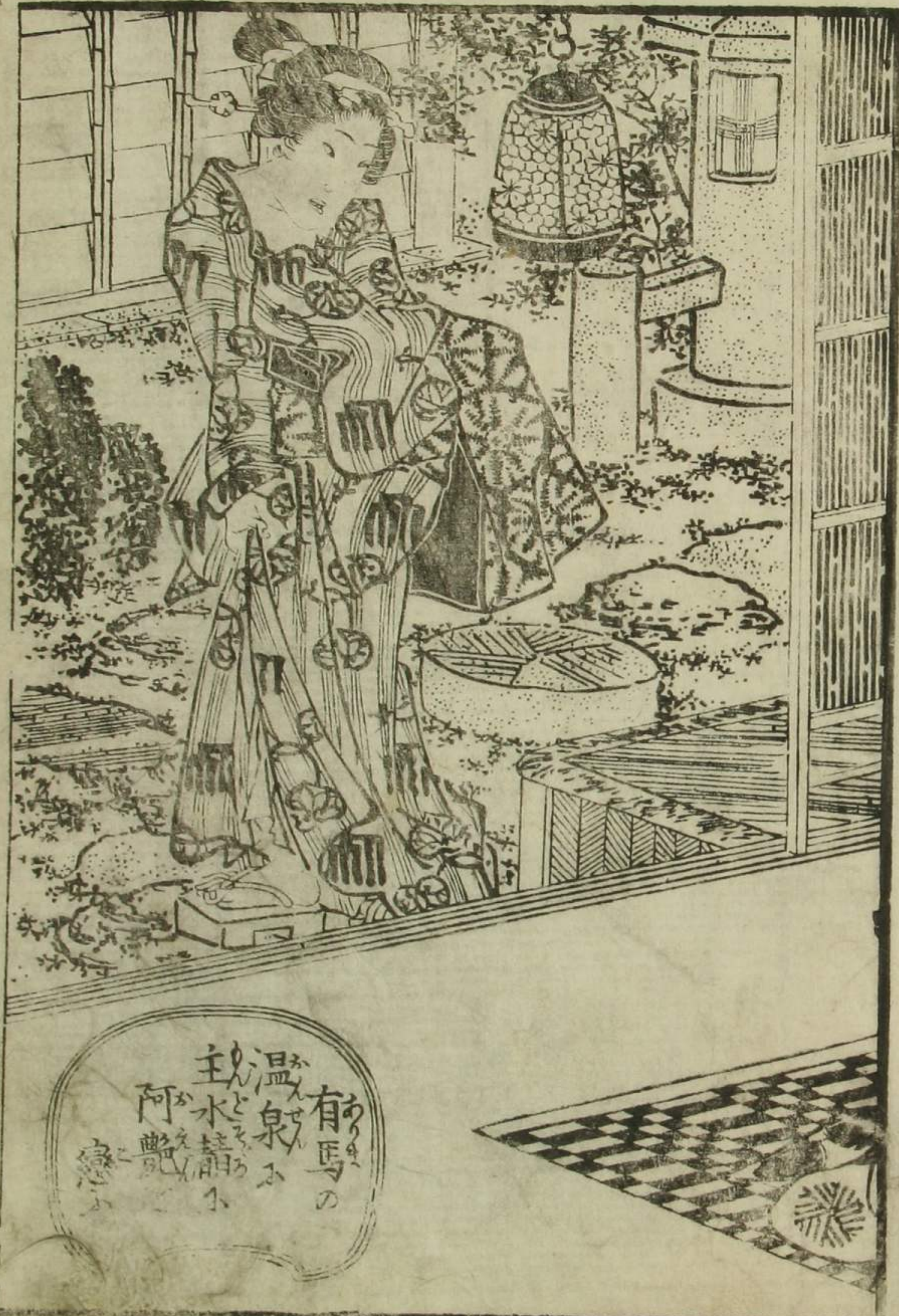
教へん少くも二百石と編りつゝ馬車と勅し今年
 廿二とやその容貌の良麗しれと女子ふして由りたま
 りしきまも最優次女ありしきまあるふ心いさむがう案弱
 めりて文武あたり丹練ありけり別て親達の神先
 二刀流の美姿と極め南河古田の歌中あてまふ
 結ぶ者ありとを以てせしむしとぞ能くふまあり病
 小優きまもあつて出仕せむし成人の勅ありま
 殿のあき病心あり医者あて茶と春んより遠知より余

松尾の決り

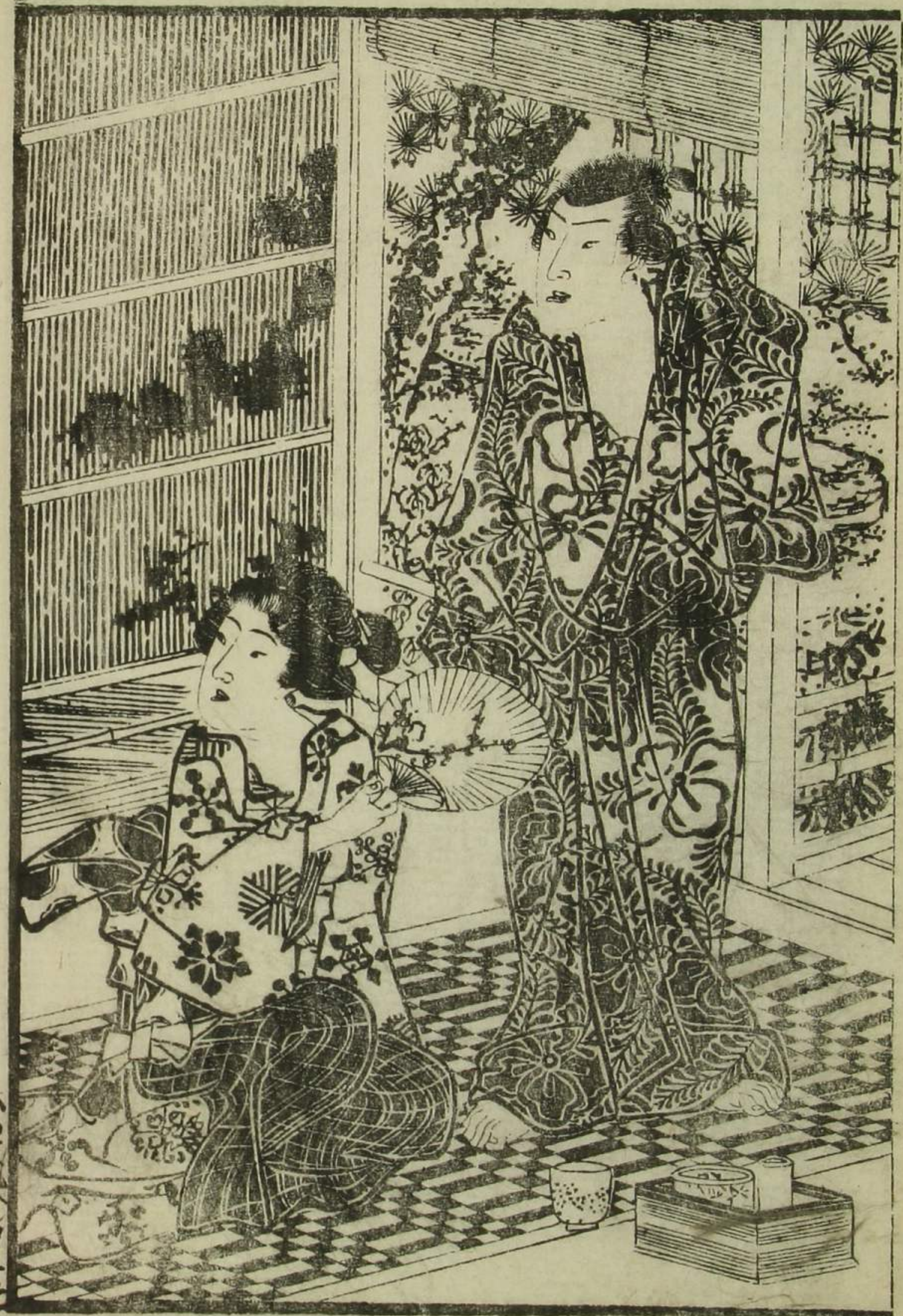
のことをよくあつねが有馬ふりて湯治とありま
 今快癒ひあるまじとをいひしとぞ能くふまあり病
 全人といふ連て縁せの下向ふ仔細の玉松坂と愛をさ
 月あつて津の玉有馬不到りて歌をよめと後をよ
 方湯宿不味く通留ありて藤衣あつりけり
 什麼と有馬の湯あり日本第一の名湯ありてその

旅ひゆ大うこるを湯着不替の女と云て是と云は湯
如と名付るが交が中不由先別ありて年長と云と大
湯女と唱へ年まご着きと小湯女といひて湯み入る
客の世話と申し酒のおもひまよして縁縁の如
とるせるるゆ那及申の旅籠屋身破整夜とるゆ
老ふ似たり閑居の休題て年尾田をあらまらびさ
あゆり余の日記とて遠処まで湯浴せし秘不実不名湯
の張いありけん病全く癒りゆく近きま古くゆん

を構とありつゆゆ目ゆまこ例の如く湯場ふりつりて
浴への濡る着と拭ひあつて浴衣と見んとする
折しも猪女の方より危傳ひ不那方の産後へゆ
んとてありかじ一個の弱女年紀の十七八あやま不款
なぐらふまを白く眼えで男と教をまておむらつちりと
あて最涼しく鼻筋をうては元やうく統うむらりの
おと敬るるがま名と教と見え合せて宛尔笑つて行る
らるお嬢めく次女と云るよりも適のをあゆ心初まて



有馬の
 温泉
 主水
 阿比
 小



有馬の
 温泉
 主水
 阿比
 小

初見送りつゝ居たりしが余りのすみおひうねてや傍ふ
居る湯女お対ひ「コウおつるりとさくやうどが今
きつゝ那娘の是までつのでんけまいが身形の振
子での容ともうくまどあややア一軒何処の女女あ「ハ
那嬢の近所の娘でござりますすか因がひどく笑ふと
のふつゝと揚屋のを母ふたそり若びでござります
うら若で開しつあいの竹ふゆで使つてまします子
那嬢ハ津瑠璃がとんど笑聲で呼ぶおあのおの心だ

九十九人中十三

愛へもびりては後美うんぞと載くそらぐをそのま
「アテる物ふくても笑聲しおあどら「た根でござり
まてて笑ふお笑致のあるそしてその優しの嬢でござり
「ヤア笑ふ様では因とて和女お教とてひりかあるが
どう
何物さうらの「ア私お教とてい変ひまゝ何力お教が
「サア終う改まりておのまていやあはれはどが笑ひ今の
笑ひ女のゆどあ「アエまどやア旦那も那娘お「イヤサ
自己おせてうらひ根なるを以外まるのいんどあてとが

中うふあつそりそりて暮ひらめひら^馬「そりやアおてい
まひめい及びません青ひまののか産安いか二階ま
佐の方へほどござあまをうらそ地へ何根ふも初れ
この中うふ致さまはまはまアアア那産の松よとア
て来りませうトあひつ湯女のあざ産あぞをまあ
精ふを産し〜そりの産安お産まて返り来河と
産安ふ入り来り首尾よく娘といひらり入産ひ来りし

よしと板知まは娘も産ひて一箇ふ来り産ぶくまふ
核扱も産らひ〜あくえくろがひ女の名とお産とて
正の年の廿九のう人と二つ三つ起つるおれどもお産
産きまはまはまその核扱の末を産られバ産が月不
つんてり十七八とあひざるおのあく最産ちらりといふ
さへ心の細くをりあると今まて例へ引つけて産し
こまてつん〜りりゆまを産産さ由十倍おて年ふ似合を
お産いと評判うけ〜まあられどもおの産の産

ありあやあや魂たま危あや不ふ身み不ふ潔けつののどどままごご盡じん由ゆああららざるざるははん
 よりより碎くだるるかかめめききをを地ちととかか疑ぎのの教けうととううちちちちりり類るいううふ
 福ふくううちち笑あはむむののここ果くわ敢かんとと安あんいい約やくええととううめめとと湯ゆ女にょが
 ひひとととと執しやくおおくく難なんににままどどととままひひちちじじ海かいととままめめてて危あやと
 めめのの秘ひふふるるああもも笑あはままららうう研けん機き娘むすめよよききしし不ふありありととふ
 ふふああぞぞ湯ゆ女にょのの秘ひううとと危あやととままつつててままええんん利りてて外がいにに性せい
 はは湯ゆのの首くび尾びののああららままんん次じのの巻まきととままををととままててああららん
 正史 いろは文庫巻之廿六
 実傳

いろは文庫

正史 いろは文庫巻之廿七
 実傳

江戸 為永春水著

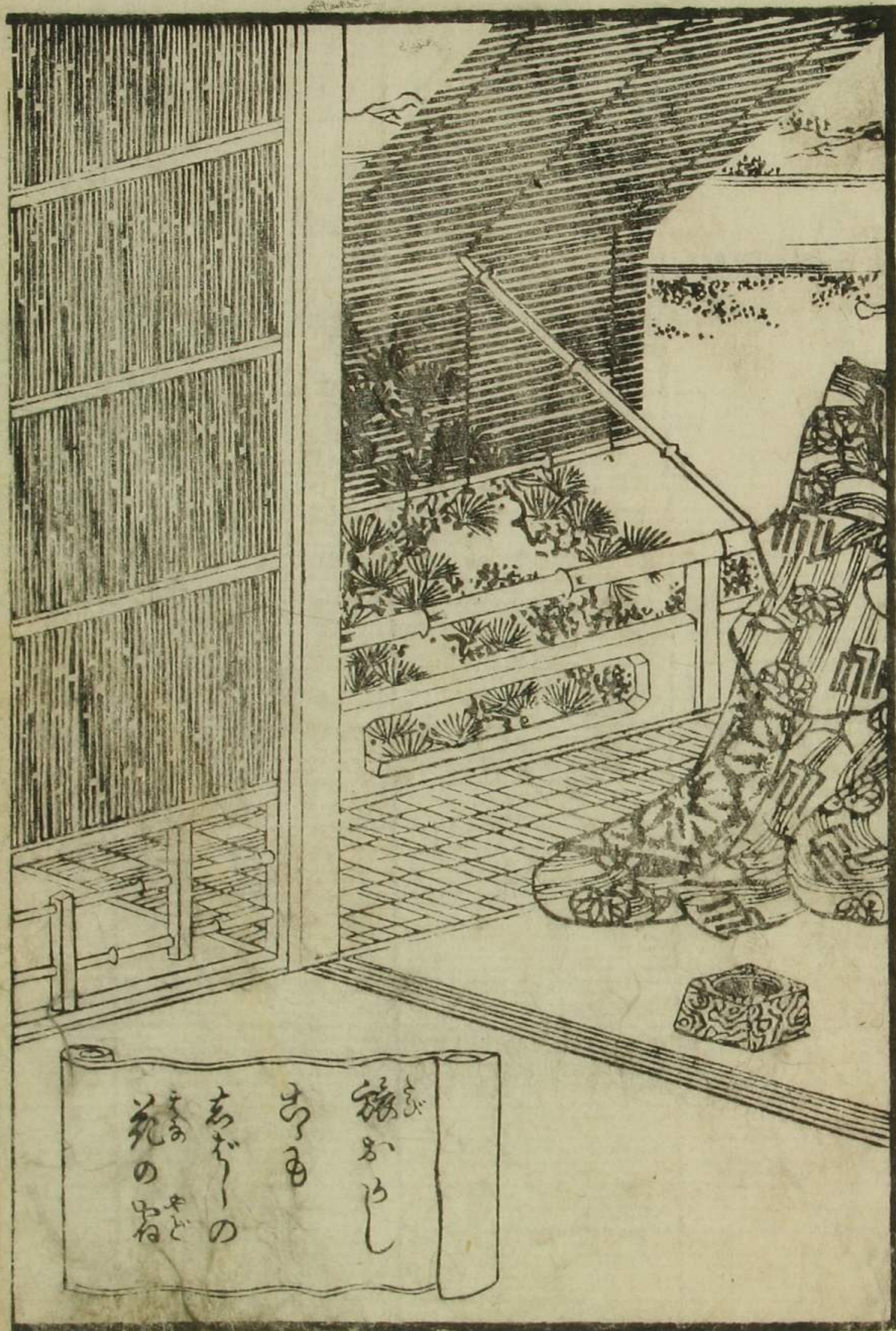
第五十三回

二個ふたごがが尾お向むきのの須す更さら辞じもも途と切きままつつまま水みづがが才さい智ちの
 務むままししゆゆかかららるるりりああのの疎そけけままがが物ものとと言いひひ知ちををううららうう
 ううととまま持もちををゆゆ法ほうままええくくけけるるががああひひ切きてて倒たふへへうう「アアウウ
 和わ女にょのの名ないいううううかか疑ぎととままああそそううごごののトト秘ひををららししくく
 同どうひひかかららままがが「トト完かん尔に知ちののここををうう付つき湯ゆががたたけ

やうてござおまんのとあらと幸坊と居ましたの由何
とか隠しまじりませう私あいらと一個の母が
ござあまて何卒末娘次母と大切やて是る
やうな男があるやう様子の身と任せよの由妻
御如くは末が是末あいらと能令是の由窮乏由
何之のよの人を是心の中居あて是る人でも是るが
母が是心するやうなるやうに様ませんやう何卒然り
いふ人として居ねて居るまんその智をあり私の

九ノ下三

身もつしんや居るまゝの爲まをたまのとお小娘と
あいらして居りまをせう不使な者と居るは徳意
ますつて下さのまよトのいふを是の感ドのりとい
さぬ和女のお堅いとあいらの親者新といふ由
湯女の由で笑いの居るが是様までといふはん
ぞふ毫もふんあげとん意なきとんあいらの由
る由でも生瀝つん様まのといふは女房ふあるとんド
よりろ一まのたうしあふ一つ由居るのいふはあるとん



縁かじし
 あも
 あぢの
 花の
 名



花の
 名

か法舞あさるるこまません三下物秋しく暮らわつるの
る服と丸くしく待つて居るを「おし」た秋あつた後
わとく解ゆしくわて往くいと死を水が黒雲の六角と
あくる虫物むまぐ二階ふ来るふたふ替りて女の身
一間の内ふびゆりあぞ合点ゆぐんと訝しくお落ふ強
まそ最前まりの二個が山と渡すつか疑がわてゆく
ゆより櫻ふ二階と下んとせしと死をまが物おらよと
おて六門くるとゆふまふ物うまぬ款付あてその終一

間ふ赴けは「イヤ」二六内そ方とゆどの由地ぢいまい
知しやるあうみ十日のか喉の目殺も実う幾ふ成
このおは才の病を由全快ふ及んどやうごうう「逆」
は地と敷きしくね城へゆらうとあふうう「地」の旗
むでコレもやまをあら用ひぬ海なぐう女まどもふ云
解て二三置まてえんこがあぬ海にゆめでもおぬ
あのでいさう「嶽」町殺しく是とを音あふまらんう
はらへふゆどはふあうと病と死海へまな後「死」の

せて迷く藤うそらうとのみ^{こんじん}藤不遠へね入^七コウ^{あま}
 業さんそのやア^{あんどう}実心のり久^六「^{あんどう}実心の^{うと}依のと^{じんぎい}現を^かい^{びつ}身が
 之^{きさぬ}空^{ひつ}として^カ知^きりて^カ居^カの^カど^カが^カキ^カ根^カ由^カま^カさ^カこ^カむ^カど^カい^カ物^カり^カの
 乃^カや^カう^カト^カや^カア^カね^カ入^カう^カ七^カ「^カ物^カり^カ乃^カね^カ入^カで^カ何^カ根^カす^カの^カめ^カう^カこ^カり^カや^カア
 大^カ変^カふる^カの^カて^カ来^カこ^カ「^カコレ^カサ^カ何^カ根^カし^カと^カ物^カど^カそ^カん^カあ^カふ^カ根^カを^カ
 ま^カで^カ變^カて^カ強^カく^カり^カゆ^カね^カ入^カす^カく^カ七^カ脚^カ叫^カぶ^カを^カて^カ定^カま^カう^カ
 一^カ登^カ登^カら^カう^カ「^カ何^カ身^カア^カ酒^カの^カ香^カど^カヨ^カ下^カ吏^カど^カら^カて^カお^カ角^カ且^カ
 於^カの^カ下^カ吏^カと^カ酒^カど^カら^カう^カト^カや^カア^カね^カ入^カう^カ七^カ「^カ此^カの^カ下^カ吏^カつと

九八下十

の^カど^カう^カ「^カ物^カ香^カど^カ「^カ今^カな^カ何^カが^カ氣^カ不^カ達^カつ^カて^カそ^カん^カな^カり^カと
 今^カの^カど^カう^カら^カう^カな^カ茶^カの^カ後^カき^カ上^カ戸^カの^カ茶^カの^カね^カ入^カる^カア^カ「^カア^カ「^カア^カ「^カア^カ
 今^カ教^カ且^カ於^カが^カる^カ酒^カと^カ物^カて^カ藤^カう^カら^カう^カみ^カ叫^カと^カす^カこ^カの^カで
 地^カ藤^カ振^カう^カと^カ也^カく^カむ^カど^カな^カり^カと^カ吏^カす^カり^カか^カぬ^カ由^カな^カみ^カ入^カと
 湯^カ女^カで^カも^カ呼^カぶ^カ東^カむ^カが^カな^カひ^カや^カア^カ「^カコレ^カサ^カ。何^カ根^カし^カこの^カど^カト
 今^カ人^カど^カも^カ七^カ脚^カの^カ返^カり^カゆ^カせ^カを^カ腫^カと^カ紙^カで^カ考^カへ^カ居^カる^カあ^カど
 「^カア^カ「^カし^カと^カの^カ大^カ茶^カの^カど^カ酒^カと^カ物^カて^カ藤^カと^カも^カぬ^カい^カま^カせ^カて^カめ^カあ^カて
 後^カ平^カか^カぬ^カと^カ二^カ個^カで^カや^カら^カう^カを^カう^カ「^カハ^カ「^カし^カあ^カる^カ後^カ七^カ

この後ときよのあつらふ一者合長が付りわくせん
とすいれくを横垣と連して春にへる。是のあつら
余は後がまつことつて先にはは舞多。月廿
えたる。藤村守小持へりわくうきらうりト是
より二個さう向あてさうのさまら春不ど果の
たふ研削まて是後も知ぐは麻ひけ。

第五十四回

結てその秋も小秋史を秘多はゆるはの残を水い

二階不只獨り今ふもか疑が思ひ来りうと外房の
程ふありなぐう森もやとてはゆ不どふりあいの
叔の七脚が主人とあふお長老最長義堂六門が
西一の板ふふりち膝き連さる二階不也きを主人ふ
縁をまきんうとあひしうとゆいさく日流うりし
お堅い且板が支不どあひ延ごいようくなるであん
と生煮茶な身とりつて果兄とて備ひよつと用
ひら且ごごび詮まいるりまより今宵その旅が思ひ



ありけ 尻お毛のわく古悪婆め人好くも物堅いかと
とがうとうとわやうとまは七助が附まじして
等のみるふあるおの「イヤ答ふおまじ子エ私まやア
おん娘の素人ごまじとどおまじこれと作てま婦
物ままどおてんまじ今ふおおへ性つて日おやア物
ところも処お名が付てお換ま云分とぞ私の素履をき
おまじおまじおやアあうまのお茶ごらうおんまうにぞこ
あくおまじいであいの。トサまのちやア物根やう角ぶらとて

一巻九下十五

おまじおまじいの子まよりうか茶をんぬ私ら
素い湯おさんとか世話とて進るう私とまおの
か例へおまじいおまじいおまじい子エ。エモシとんおまじ
細とまうておんでも解らまいの久物穿ぬむらう
ヨウ奴さん「エ置置しいハイ何ぞおまじとま婦物
とてかおまじいおまじい。へんおおまじ茶と湯さアそま
おまじおまじいおまじいおまじいおまじいおまじい
らわんがまじとまじとまじといおまじのが全体おまじと

今此形は何と云作らんと由は奴さんがあつて人と
あつたさうあつてわへいさうつくと云やア踏殺さぞと云
の巻と揃り揃めて先かうべき坊ひふか懸ハ連ふ
女由名にかういさうの郡ヲ携子ふ志怖とい
ど九備はう人ふ云暮王赤門の若の身ふ入つて
うぬ候もあると云久詮方より七助ふさひ込め
らしてと云と云と云てその場と云去けるさうと云
先ふりさうい又か懸が音伝いさうと外房あありて

あつたさうあつて

流石ふ儀ふ何やりやうふ人の争ふ携ふあるを
何よりやうんと縛りて携ふのはまぐて来て受けが那
七助とか懸こが聞そ最中よりしうが流石ふ家来の
手紙と云てその場へ教も出うねが余あても七助が
素何あまむが那やう人由頼まぬさう出ふわ我坊と云
彼やうんと心中に頼み懸ると云と何とうせんとも云
の内ふか懸いすこく海し携ふふいあくさうの懐の
物ふ余まむが堪うねて七助と一ふふびつけヤイ七助

